

日本語の外来語の増加と中国の日本語教育

田 島 毓 堂・金 華

1. はじめに

日本は外国との間の人・物・情報の交流の増大や、諸分野におけるグローバル化の進展等に伴い、日本語の中での外来語の使用が非常に目立って増大しており、日本人にとっても覚え切れないほど、新しい言葉が次々に出現している。その中で著しい増加を見せているのが英語から来る外来語である。専門領域で使われるはずの言葉が一般社会にどんどん流出し、白書・広報紙などの公的文書や多くの人を対象とする新聞・放送（テレビとラジオ）や国を代表する政治家のインタビューなどにも目新しい外来語が勢いを増して使われている。しかし、日本語の外来語は英語の発音をそのままカタカナにしたものではなく、日本語の発音に沿った表記が多く、また省略されたカタカナ表記が目立つことが特徴である。つまり、言葉は生き物であり、常に新しいものが使われるようになり、それを身につけるのが人間である。日本語教育に携っている者なら、日本語の外来語増加への対応策をどうしても考えなければならないと思う。

日本語の外来語の増加は第二言語習得者に更なる習得難をプラスしたことになったと思われる。途切れなく増加しつつある日本語の外来語の授業や習得をどのように行っていくか、その対応策の検討が日本語教育の一課題である。本研究では、日本語の外来語の増加領域、傾向、使用状況、理解度などを把握することで、第二言語習得としての日本語教育の手助けになればと思う。また、日本人の若者（大学生）を対象に外来語への理解度を調査し、また日本語を専門とする中国の大学の日本語学習者（中・上級レベル）を対象としたアンケートの分析を行い、日本語の外来語への認知度を確かめることによって、中国の日本語教育の更なる発展に少しでも貢献できればと願う。

2. 日本語の外来語

2.1 外来語の種類

日本語の外来語は多様性に富んでいる。日本語としてすでに定着し、日本語教育でも馴染みある外来語はいくつかの種類に分けられる。詳しくは、

- ①日本になかった事物や新概念を表わす外来語で、すでに慣用の久しいもの

例：パン・キムチ・アンコール・ラーユ・クロワッサン・……

- ②専門用語として取り入れられた外来語（専門分野によって非常にたくさん見られる）

例：オゾン・ファイル・ツール・コロケーション・シソーラス・……

- ③イメージをよくするための外来語（日本語の外来語訳）の造語

例：「職業婦人」を「キャリアウーマン」と言い換えて新しいイメージを出す

- ④和製外来語（若者の流行語や省略外来語）

例：マック・マイホーム・パソコン・コンビニ・バックミラー・……

2.2 日本語の外来語の特徴

日本語の外来語の特徴には次のようなものが挙げられる。

- ①完全に日本語として定着したもの
- ②一時的に使われた後、消えたもの
- ③ある特定の分野や職業の間にのみ使われ、理解可能なもの
- ④国際化が進むにつれどんどん増えてくるもの
- ⑤便利のために省略された外来語等々
- ⑥カタカナ表記になった日本語、外来語と言い切れない言葉、例えば、
シャハン（車内販売）・イクメン（育児をする男）・イケメン・……

外来語が日本語として定着する過程には新陳代謝が見られ、また使われる領域や変化も一致しているとは限らない。きわめて複雑である。近頃、日本の専門分野における参考文献には外来語の使用が目立っており、日本語学習者にとっては習得困難点が増した。

それに、日本人は外来語ではないものもカタカナで書くことが多くなったように思われる。例えば、どこかに名前と住所を書くとき、よくカタカナの読みを書く欄がある。日本人であればそれは容易であるが、日本語学習者にとってカタカナは書くことも読むこともひらがなより容易ではない。それは周知のように日本語学習者はどんな母語の持ち主でも最初に習得するのがひらがなであり、カタカナはその後の習得になっているからである。したがって、カタカタ書きの語が得意でない学習者が多くみられる。

その上、カタカナで表記される領域も比重も一様でなく、表記だけでは外来語として認めてよいかどうか学習者を迷わせるものが増えつつある。さらに日本語の外来語は国名・地名・人名は原音に忠実に発音しようと努力するが多いが、普通は日本語の音韻体系の許容範囲内で発音されるため、日本語学習者にとっての習得難がかなり増えたと言える。

2.3 外来語増加の要因

日本人の外来語の使用は次のような利点から使っていると思われる。一番大きな要因は、日本語の表記法が外国語・外来語を取り入れやすい構造になっていることである。

このほか、さらに次の諸点が認められる。

- ①日本語による社会的なコミュニケーションが一層適切に行われるようにしていくこと
- ②日本語を一層魅力的で価値あるものにしていくこと
- ③日本語に関する働き掛けを通して人類の有する文化の多様性が世界の中で生かされるようにしていくことが大切であるという認識
- ④日本語は昔から外国語を取り入れてきたということ
- ⑤日本語や日本文化が豊かになるということ

以上のようなこと以外に日本の若者が欧米諸国への憧れから、その言葉をそのまま受け入れる態勢になったことがあげられる。また、先端技術の受け入れに迅速に対応するために、ほとんど英語に依存する日本語になってしまった。それが外来語を増やさなければならなかったことにつながった。

しかし、外来語の使用を好んでいるという、日本人全体が新しい外来語のすべてを理解しているわけでもないし、みんなが使えるというわけでもない。また、日本語の外来語の使用で外国人とのコミュニケーションを阻害するケースも多く見られる。この新外来語⁽¹⁾の認知度、理解度、使用度はさまざまであり、その現状をはっきり日本語学習者に伝える必要があると思う。

3. 外来語・外国語増加の現状と問題点

外来語・外国語は、いままで日本になかった事物や新概念を表すため、専門用語として取り入れるため、新しいイメージを表すため、等々の機能を担って日本語の中で使用され始めた。また既に日本語として定着しつつあるものが大幅に増加している。そこで、日本人が新しく使われている外来語を全部理解しているか、つまり、その認知度はどうなっているのか、などを把握しようと試みた。

本研究では主に外国語として、日本語教育の中で外来語の増加をどうとらえるか、どう受け入れて習得していくべきか等を考える。まず、日本語母語話者は外来語の使用増加についてどう考えているかを文化庁の調査結果から見てみる。

日本語の外来語・外国語の使用が増加するのに伴って、日本社会の関心度も高まっている。平成7年の文化庁の世論調査では、今以上に外来語や外国語が増えることについて、「多少は増えてもよい」が44.8%と最も高く、以下、「今以上には、増えない方がよい(30.4%)」、「いくら増えてもよい(13.1%)」、「減る方がよい(6.6%)」、「分からない(5.0%)」と続いている。外来語の増加に対しては、それほど抵抗を感じていない日本人が多く、特に若い世代には増加容認の割合が高いという結果が出ている。つまり、増えてもよいという賛成の見方をしているのが半数近いことが確認できる。

続いて、表1は、平成14、19年度の世論調査の結果である。日常生活の中で、外来

表 1

	どちらかと言うと 好ましいと感じる	どちらかと言うと 好ましくないと感じる	別に何も 感じない	分からない
平成19年	14.5%	39.8%	43.7%	2.0%
平成14年	【16.2%】	【36.6%】	【45.1%】	【2.0%】

語や外国語などのカタカナ語を交えて話したり書いたりしていることを、どちらかと言うと好ましいと感じるか、好ましくないと感じるか、それとも、別に何も感じないかについて「どちらかと言うと好ましいと感じる」と答えた人が14.5%、「どちらかと言うと好ましくないと感じる」が39.8%、「別に何も感じない」が43.7%となった。平成19年の調査は平成14年度調査の結果と比べると、「どちらかと言うと好ましいと感じる」が2ポイント減り、「どちらかと言うと好ましくないと感じる」が3ポイント増えている。

また、外来語の使用や容認の割合も若い世代から、世代層によって異なっていることが分かった。それは平成19年度の調査で、「別に何も感じない」を選んだ人の割合は、年代が若くなるに従って少しずつ高くなる傾向がある。一方、「どちらかと言うと好ましくないと感じる」人の割合は、年代が上がっていくにつれて高くなっていることが確認できた。外来語や外国語などのカタカナ語が多いと感じることが「よくある」「たまにはある」と答えた人（＝「ある（計）」）は、すべての年代で8割を超えている。中でも30代では9割強となっている。一方、「多いと感じることはない」は、最も割合の高い60歳以上でも13.4%と、どの年代でも1割前後となっている。

16～19歳から40代までは「別に何も感じない」の割合が最も高いが、50代と60代では「どちらかと言うと好ましくないと感じる」の方が高くなっている。

外来語使用の理由は、表2から分かるように「カタカナ語でなければ表せない物事があるから」が65.9%と最も多く選択されたが、平成14年度調査と平成19年の調査では7ポイント減少している。また、「カタカナ語の方が分かりやすいから」は11ポイント減少している。一方、「日本語は昔から外国語を取り入れてきたから」は7ポイント、「日本語や日本文化が豊かになるから」は4ポイント増加している。

調査結果からは、外来語の増加を多くの日本人はそんなに好まないことが分かる。し

表 2 外来語を使う理由

	平成19年度調査	平成14年度調査
カタカナ語でなければ表せない物事があるから……	65.9%	72.5%
カタカナ語の方が分かりやすいから……	31.0%	42.3%
日本語は昔から外国語を取り入れてきたから……	25.1%	18.5%
日本語や日本文化が豊かになるから……	23.0%	18.8%
カタカナ語はしゃれているから……	4.5%	8.1%

かし、生活や仕事上、または人とのコミュニケーションの関係上仕方なく受け入れるか、使用する場合が多いのではないかと判断できる。

外来語の増加には次のような問題点がある。

- ①同じような言葉が日本語にあるにもかかわらず、外来語・外国語を使うのは日本語の軽視につながり、日本語の伝統を崩すことになる。
- ②外来語・外国語を使う傾向は特に若い世代に多く、こうした語の多用が世代間のコミュニケーションにとって障害になる可能性がある。
- ③原語の意味から外れた誤った外来語使用やいわゆる和製英語の濫用は避けるべきである。日本語を乱すだけでなく、日本人の外国語学習にとっても障害となる。

このように日本国内でも外来語の使用変化に注目していることがよく分かる。言葉というものは、時代の変化に伴って変化が必ず起きる。然し、其の激しい変化を見せている言語を、外国語として習得しようとする者にとって、これはかなりの難問である。

4. アンケート調査とその分析

本研究ではその難問という外来語について日本人母語話者（大学生と大学院生）84名と日本語を専攻する中国人大学生（日本語学科専攻生）169名を対象に認知度（理解度）について調査を行った。調査結果の分析を行うことによって、日本語教育の改善においてどんな対策案が考えられるかを検討する。

調査期間：2010.9～2010.12

調査対象：日本の大学——愛知学院大学文学部2、3年生

中国の大学の日本語学科——北京第二外国語大学、上海外国語大学、華南理工大学、広東外語外貿大学、華南師範大学3、4年生

調査内容：

外来語の調査においては、学術論文専門用語、新聞記事用語、一般文章用語、ホームページ用語、グルメ用語などに分けて認知度（意味の理解度）を図った上、外来語の増加における認識においていくつかの質問事項を加えた。その調査結果を表にまとめると次のとおりである。

表3の学術論文に使われた外来語は主に論文のタイトルから抜き出したものである。調査結果を見ると驚くほど理解度が低い。それに、日本語母語話者が学習者より理解度が低い外来語があるということにはどのような受け止め方をすればよいのか、戸惑う。学術的専門用語はそれが使われている文章を読まない限り、母語話者であっても理解できない語がある。「フォローアップ調査」の母語話者の理解度19%に対し、学習者は60%であり、その差は41%である。このような結果になったのは母語話者より学習者の文献習得がよくできているとしか判断できないのではないと思われる。「ポジティブ・ポライトネス」など、日本語の敬語の研究文献にあまりにもよく見られるものであ

表3 学術論文用語（日本語教育における論文によく使われる言葉）

	日本人母語話者	人(%)	中国人日本語学習者	人(%)	差(%)
アプリケーション	57	(68)	65	(38)	(30)
フラット化	57	(68)	64	(38)	(30)
グローバル化社会	80	(95)	108	(64)	(31)
ニューススレッドを設定する	32	(38)	42	(25)	(13)
国際シンポジウム	45	(54)	104	(62)	(-8)
フォローアップ調査	16	(19)	102	(60)	(-41)
ポジティブ・ボライトネス	11	(13)	41	(24)	(-11)
ストラテジー	24	(29)	49	(29)	(0)
フォーマルな場面	23	(27)	93	(55)	(-28)
対比談話標識のプロトタイプ	52	(62)	53	(31)	(31)
学習者のニーズ	79	(94)	137	(81)	(13)
コロケーションが多い	11	(13)	49	(29)	(-16)

表4 新聞記事における外来語

	日本人母語話者	人(%)	中国人日本語学習者	人(%)	差(%)
衆院選マニフェスト	75	(89)	57	(34)	(55)
環太平洋パートナーシップ 協定 (TPP)	49	(58)	84	(50)	(8)
シーレーン（海上交通路）の 安全確保	11	(13)	49	(29)	(-16)
労働争議を処理する メカニズム	76	(90)	81	(48)	(42)

るが、母語話者にとっては馴染みのない外来語であることが確認できた。つまり、ここではっきりしたのは学術文献による外来語の理解度は母語話者も学習者も低いことが明らかになったと同時に、母語話者への浸透が非常に低いことが分かった。ただ、以上の表から得られた結果を元に母語話者は皆が皆理解度は低いとは言いきれない。

表4は新聞記事による外来語である。学習者にとってはかなり難しいもので、その理解度も低いこと。「シーレーン」というかなり新しい外来語の理解度が母語話者も学習者両方とも低いことであり、母語話者のほうが学習者より低いのは、母語話者の新聞記事に対する関心度が低いことを示唆しているといつてよい。また、新聞記事における外来語の理解度は母語話者と学習者間のばらつきが大きいことが今回の調査で分かった。

表5の一般文章における外来語については、母語話者に比べ、学習者の理解度ははるかに低いことが明らかになった。パーセントの差が40を超え、平均3割程度に止まっている。この一般文章では、母語話者にもよく知られている外来語が多く使われている。とすると、また学習者の習得範囲が限られており、母語話者がよく使う外来語への

表5 一般文章における外来語

	日本人母語話者 人(%)	中国人日本語学習者 人(%)	差(%)
フェイドアウト	65 (77)	54 (32)	(45)
日ごろのストイックな食生活	67 (80)	55 (33)	(47)
人気のパロメーター	78 (93)	45 (27)	(68)
あなたのコンディション	82 (98)	98 (58)	(40)
ペンションが経営不振	55 (65)	40 (24)	(41)

表6 11月1日15時45分ヤフーホームページの画面における外来語

	日本人母語話者 人(%)	中国人日本語学習者 人(%)	差(%)
オークション	84 (100)	95 (56)	(44)
ファイナンス	33 (39)	85 (50)	(-11)
yi モバゲー	63 (75)	26 (15)	(60)
グルメ	83 (99)	56 (33)	(66)
ブログ	80 (95)	86 (51)	(44)
ビューティ	82 (98)	114 (67)	(31)
トピックス	79 (94)	83 (49)	(45)
エンタメ (エンターテインメント)	79 (94)	57 (34)	(60)

理解度が非常に欠けているということである。

表6は情報化社会の現在、よく使われているというインターネット上の外来語の理解度への調査結果である。母語話者の理解度は「ファイナンス」を除いては平均90%を超えている。しかし、ネット利用率がかなり高いといわれている日本語学習者のネット専門語以外の理解度は低く、「グルメ」「トピックス」など極く普通に使われている外来語があまり知られていないことが判明した。

表7は日本人にとって関心度が高いものである。中華、和洋に富んだグルメにおける外来語の調査結果である。種類に富んだ食文化を持った日本であることもあって、その理解度はとても高いことが判明した。また、調査票を作る際、その用語があまりにも多いことに頭を痛めた。つまり、新しく現れるグルメ用語には外来語が多すぎるということである。たぶん母語話者も意味が分からないグルメが多いのではないかと思う。したがって、見たこともない、食べたこともないグルメ用語を理解できない学習者が多いであろうからなんとなく、この結果に納得しなければならないのではないかと思える。しかし、日本語を習得するなら、母語話者が身近に使っている言葉はなんとしても理解し、身につけることが言語習得のためには必要である。

表8は外来語の使用やその増加に対する母語話者の認識を調査した結果である。半数以上、つまり71%の母語話者はよく外来語を使用するし、使う主な理由としてはコミュニケーションをうまく行うためであるといっている。また、外来語の増加には反対の割

表7 グルメにおける外来語

	日本人母語話者 人(%)	中国人日本語学習者 人(%)	差(%)
コンソメスープ	84 (100)	40 (24)	(76)
ベーコン	84 (100)	56 (33)	(67)
オムライス	84 (100)	58 (34)	(66)
エビチリ	84 (100)	49 (29)	(71)
グラタン	84 (100)	25 (15)	(85)
マヨネーズ	84 (100)	77 (46)	(54)
ドレッシング	84 (100)	53 (31)	(69)
ゼリー	84 (100)	90 (53)	(47)
パウンドケーキ	77 (92)	54 (32)	(60)
モンブラン	84 (100)	15 (9)	(91)

合も低くない。しかし、外来語の増加を望むかについては、外来語なしで日本語表現は不可能だとしながらも望まないと答える母語話者が61%にものぼっていることが分かる。つまり、勢いよく増え続ける外来語の増加に母語話者もその理解に困難を感じている。要するに、外来語を使わない日本語のコミュニケーションは不可能であり、円滑な人間関係を保つためには、日本語の外来語は大きな役割を果たしているということである。

表9は外来語についての学習者への調査結果である。日本語学習者は日本語の外来語には非常に困難を感じるとともに、これ以上増え続けたいことを望んでいる。難しいと答えた日本語学習者は69%を占めており、外来語より日本語の方が覚えやすいと答えている者が66%である。本来外国語の習得は難しいことであるのに、変化が激しい日本語の外来語はこれ以上増えないことを望んでいる学習者が大多数である。

以上のような結果分析から、グローバル時代における日本語教育を見直す必要があるだろう。特に、日本語教科書の改善やカリキュラム設定など常にその変化に伴った対策を取る必要があると思う。いかに学習者のニーズに応えられる教科書やカリキュラムの設定をするかについて以下のような提案をしたい。

- ①情報把握。グローバル時代の情報収集の手段をうまく利用し、すばやく、正しく、入手し、適切に伝えることが大事であると思う。ここでは教育者だけではなく、学習者自身の情報収集も進める必要がある。
- ②言葉の変化や時代の変化を教科書に再現する。日本語教育で使われる教科書は文法中心のものが多く、特に新しく生まれた外来語がほとんど見られない。したがって、教科書に使われる文章は母語話者の身近な生活や考え方、流行を反映したものを採用する必要がある。しかし、簡単に日本語に言い換えられる外来語・外国語や耳慣れない外来語・外国語などが入った文章は安易に使わないようにすべきであ

表 8 日本語母語話者対象

問 1	普段よく外来語を使いますか。 人（％）		
	よく使う 41 (49)	たまに使う 40 (48)	使わない 1 (1)
問 2	外来語を使うとどんな利点があると思いますか。		
	コミュニケーションがうま くいく 60 (71)	格好いいと思う 18 (21)	時代遅れではないことがア ピールできる 14 (17)
問 3	日本語の外来語の増加についてどう思いますか。		
	いいと思う 49 (58)	よくない 29 (35)	
問 4	外来語なしの日本語表現は可能だと思いますか。		
	可能 27 (32)	不可能 56 (67)	
問 5	日本語の外来語がどんどん増えていくことを望んでいますか。		
	望んでいる 29 (35)	望まない 51 (61)	

表 9 日本語学習者対象

問 1	日本語の外来語の習得はどうですか。 人（％）		
	難しい 117 (69)	易しい 2 (1)	難しくも易しくもない 48 (28)
問 2	日本語の外来語が増加していることを知っていますか。		
	知っている 133 (79)	知らない 34 (20)	
問 3	日本語の外来語の増加についてどう思いますか。		
	いいと思う 56 (33)	よくない 111 (66)	
問 4	外来語より日本語のほうが覚えやすいと思いますか。		
	はい 111 (66)	いいえ 56 (33)	
問 5	日本語の外来語がどんどん増えていくことを望んでいますか。		
	望んでいる 28 (17)	望まない 139 (82)	

る。主に広く国民一般を対象にしている官公庁、新聞・放送等によく使われる文章や、一般の人々の生活に浸透した外来語が使われている文章を教科書に使うべきである。

- ③情報収集の手段を最適利用。教科書はどうしても掲載範囲が限られているため、学習者に満足がいくように作り上げることは到底無理なことである。インターネットの普及の便利さを最大限に利用して続々と増え続ける外来語の学習を行うことが非常に重要な学習方法であると思う。
- ④公的機関を利用した情報収集に力を入れる。グローバル化が進む今、的確な情報収集は必ず公的機関を利用する必要がある。日本語といえば、国立国語研究所の調査結果や新聞機関で行う世論調査の結果を元に言葉の変化の現状を把握、それによった対応策を出すことが重要である。

5. 終わりに

国際化の進展や新技術の開発、欧米諸国などとの交流が進むに伴って、新しい概念やニュアンスの提示など、外来語・外国語を使用せざるを得ないことが多くなってきている。また、外来語・外国語を用いた方がその日本語訳よりも分かりやすい場合もある。日常会話に外来語の比率が増加の傾向にあり語源不明、スペル不明な当字的な外来語が増えており、専門外の用語は調べようが無いものも多く見られるようになった。また最近の若者の言葉が一般化する傾向もあり、そこには外来語・カタカナ語が非常に多くなっている。そこで、本研究では日本語の外来語の増加について母語話者ならびに学習者はどう受け止めているか、またいくつかの分野における外来語の理解度はどの程度であるかなどのアンケート調査を行い、その分析を行ってみた。

本研究では、学習者はもちろん母語話者の半数以上が外来語の増加は望ましくないと考えていることが分かった。しかし、母語話者は外来語が増えることは好まないが、外来語がコミュニケーションにはなくてはならない、重要な役割を果たしていると同時によく使っていると答えた割合も高かった。つまり、日本語の外来語の増加は認めざるを得ないものであり、学習者にとっては習得難点が増したことになるが、言葉の変化に応じた学習を上手にこなすことを早急に行うべきであることが確認できたと言える。

また、外来語もその分野によっては母語話者にもかなり難しいものがあって、学習者が外来語を習得する際、どれをどのように身につけるかも検討しながら学んでいく必要があると思った。

要するに、本研究を通じて日本語の外来語の増加やその使用現状を、日本語教育では常に把握する必要性があるということがはっきりした。また、母語話者の日常生活で使われているグルメ用語や若者の流行語（継続性が高い）などは発達した情報収集の手段を使って、学習者は身につけるべきであると思った。それは母語話者との交流をさらに深める。日本語レベルを高い水準に引き上げるためには、日本語の外来語を習得する必要があることをもう一度確認しておきたい。外来語の増加、その変化に伴った日本語教育のあり方をいっそう深めることを今後の課題としたい。

注

- (1) 新外来語とは、主に和製外来語で辞書などに載っていないものをさす。また、若者の中で流行語として使われている省略外来語、「サボる」「ダブる」など名詞語尾を活用させ動詞として使う外来語などを本研究では新外来語と称する。

アンケート調査資料収集用文献

- 池田佳子（2007）「初級日本語学習と対話能力向上目的のアウトプット（産出）の機会について」『第5回日本語教育研究集会予稿集』名古屋大学国際言語文化研究科
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 沼田善子（1992）『日本語文法セルフマスターシリーズ5「も」「だけ」「さえ」など——とりたて』くろしお出版
- ヤフーホームページトピックス（2011.11.5）<http://www.yahoo.co.jp/>

参考文献

- 陣内正敬（2008）「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』（関西学院大学）11、47-60
- プレム・モトワニ（1991）「日本語教育のネック——外来語」『日本語教育』74号、28-33
- 堀切友紀子（2003）「現代日本語における外来語の研究」『金沢大学語学・文学研究』第30・31合併号、43-51
- 文化庁（2002、2007）『国語に関する世論調査』

（文責 金華）

